

明末吳興凌氏刻書活動考

— 凌濛初と出版 —

表野和江

はじめに

白話短編小説集として「三言」と並び稱される「二拍」(『初刻拍案驚奇』『二刻拍案驚奇』)の作者凌濛初とその一族凌氏は、明末の萬曆年間末と崇禎年間にかけて、「套印本」と呼ばれる多色刷りの豪華本を中心に數多くの書籍を刊行したことが知られている。凌氏が主に郷里吳興(今の浙江省湖州市)で刻したこれらの書籍は、版本學の分野では、明代を代表する版本様式「套印本」の主要な研究對象とされてきた。一方凌濛初およびその作品研究に當たつて、刻書の事實に觸れるものは少なくないものの、その多くは濛初の育つた凌氏の家風・文化的雰囲気といったものを説明する材料として、これを扱つて

いるようだ。

近年、商業出版と文人との關わりについての研究がすすめられ、多くの成果が生まれている。明末の經濟的繁榮を背景に飛躍的な擴大を遂げた出版文化は、必然的に「儒」と「賈」のかかわりを密にし、そうした中から積極的に出版に従事する文人—例えば「三言」の作者馮夢龍のような人物も現れた。商業出版というマスメディアと「士」でもある文人の結合は、明末の社會全體にかかわる重要な問題であり、

そこで刊行された書物の検討にはこれらを念頭に置いた巨視的な觀點が不可欠となる。

一方、凌氏が行なつたのはこうした商業出版—所謂「坊刻」ではなく、一般に個人的・趣味的と目される「家刻」であつた。特に套印本はその美しさ、また一書を刻するための費用が普通の書に數倍すること等から一種美術品の如く珍重され、例えば『史記鈔』九十一卷の泰昌元年(一六二〇)陳繼儒序には「套印本を」寶藏する者は異錦名香とし、高閣に裏置す」と言う。

しかし既に指摘されるように、これらの書は限られた僅かな人々の欣賞のためにのみ刊刻されたわけでは決してないだろう。萬曆二十年(一五九二)の進士謝肇淛は、金陵(南京)、新安(安徽省黟縣)、吳興の三地の刻書は精巧なこと宋版にもひけを取らないほどだが、利益の追求にはやれば刻書に金をかけることができず精巧なものとは作れなくなる、このごろ吳興と金陵は急激にそうした病に陥つてしていると指摘し、かく言う。

吳興凌氏の諸刻、書を成し利を射るに急に、又た人を倩いて編摩するを亡しむ。其の間、亥豕相い望む、何ぞ其の然るを怪しまん。

謝肇淪は登科後、湖州府推官に敘せられており、これは當地での實際の見聞に基づく記述かと思われる。また先の陳繼儒序にも「吳興の硃評書錯出し、貧富好醜を問う無く、垂涎して之を購わんとす」とあり、凌氏が營利出版を行つていたこと、そこで主に刻された套印本が當時廣く知られ、盛んに買い求められた様子が見てとれる。凌氏もまた、熾烈化する出版競争に参入していた「儒」に他ならず、しかも「套印本」という明一代を代表する刻本をほぼ専門に行つたその活動は、極めて時代を反映したものと言うことが出来よう。そしてこうした凌氏の刻書活動の中心に位置したのが、他ならぬ凌濛初その人であつた。本稿は、明末吳興における凌氏の刻書活動を、凌濛初に視點を据えて考察していきたい。

一 出版活動の基盤と背景

明末の吳興刻書業の隆盛については始めに引いた謝肇淪のほか、やはり萬曆間の人で藏書家として知られる胡應麟の『少室山房筆叢』巻四「經籍會通」にも同様の記述が見えるように、吳興刻書は謝肇淪が「宋版にもひけを取らない」と評した質の高さをもつて急速に成長し、萬曆間には刻書の中心地として天下に冠たる蘇州と比肩するまでになつていた。その基盤にあつたのは、言うまでもなく明末の江南經濟の繁榮である。

太湖の南岸に位置する吳興は、西は苕溪に枕し、支流の東苕溪、西苕溪を始めとした大小の河川が全體を縱横に流れる肥沃な土地柄で、宋代には「蘇湖熟せば天下足る」（范成大『吳郡志』卷五十雜志）と稱される一大穀倉地帯であつた。その米作主導の經濟に變化が起こつたのは元末である。新たに運河が開通して蘇州、嘉興、鎮江等と結ば

れると、吳興は米その他の産物を積んだ船の行き來する交通の要路となる。更に明初に興つた蠶絲業が永樂、正統期の大規模な運河の整備に伴つて發展し、吳興産の絹絲は世に廣く流通したのであつた。明代中期以降は海外貿易の禁令が弛んだこともこの傾向に一層の拍車を掛け、萬曆間に至つて吳興經濟は空前の繁榮を見たのである。

一方、吳興の刻書業の基礎は既に南宋の時代に形成されてきた。王國維『兩浙古刊本考』に著録される「湖州府刊板」の目錄には、紹興二年（一一三二）刊『大藏經』五千四百八十卷を始め大部の書を含む十五種の宋元刊本が記載され、その中には湖州報恩光孝禪寺、湖州道場山禪幽之庵、思谿圓覺法寺等の寺で刻された佛書のほか、「刊於吳興里舍」（『石林居士集』一百卷）、「花谿沈氏伯玉刊於家塾」（『松雪齋文集』十卷外集一卷續集一卷）等の刊記のある、家刻と思われる書も含まれている。このような刻書業の基礎は、經濟發展を背景に活發化した蘇州、常州、南京、杭州、徽州等、近隣の刻書先進地區との人的・物的交流とも相俟つて、凌氏ら明末吳興刻書業の隆盛に與つたであろう。『元曲選』の編者として知られる臧懋循（晉叔）も、この萬曆間の吳興の刻書家の一人であつた。

さて、濛初およびその一族については『凌氏宗譜』⁵⁾があり、また『烏程縣志』『湖州府志』等に記述が見える。いま葉德均「凌濛初事跡繫年」（一九七九年、『戲曲小說叢攷』所收、中華書局）、荒木猛「凌濛初の家系とその生涯」（一九八〇年、『文化』第四四卷第一・二號）なども参考に、濛初の經歷の出版に關わると思われるところを簡單にたどれば、凌濛初（一五八〇～一六四四）、字は玄房、號は初成、別號は即空觀主人、吳興烏程の人。祖父は舉人、父は進士に及第しており、代々官僚を勤める文字通り書香の家であつた。祖父、父ともに多くの著作

があるが、特に父迪知は、乾隆『烏程縣志』『人物』の條には『湖錄』を引いて「日々群書を校夷し、雕板世に行わる」と言う。『國朝名公翰藻』五十二卷、『古今萬姓統譜』一百四十六卷、『氏族博攷』十四卷、『國朝經世類苑』四十六卷、『文林綺繡五種』五十九卷等がその刊行した書として知られる。また迪知の弟、つまり濛初の叔父の稚隆も多くの史書を刊行しており、『史記纂』不分卷、『史記評林』一百三十卷、『漢書評林』一百卷、『春秋左傳注評測義』七十卷等が知られ、このうち『史記評林』以下の三書は、書名からもわかるように古今の批評を集めた「評點本」である。次章以降に見て行くように評點本は明代に流行し、のちには凌氏が刻するようになる「套印本」の代表的なテキスト形式ともなった。いずれにせよ凌氏が本格的な書籍の編纂刊行を行うようになったのは、濛初の父、迪知の代からのようである。

濛初が迪知の四男として生を受けた時、既に長兄と次兄は卒しており、また二十二歳上の三兄がいたが、父が萬曆二十八年（一六〇〇）に亡くなった時に凌氏の新たな主人となったのは二十一歳の濛初であった。この間の経緯については詳らかにしないが、爾來、凌氏の當主であると同時にその刻書活動の中心となるべき立場をも擔うことになったわけである。

刻書事業を引き継いだ濛初は、その一方で官僚の家門を保つべき努力もしている。十二歳で生員、十八歳で漏膳生となり、父の喪の明けた萬曆三十一年（一六〇三）には時の國子監祭酒に上書している。しかし三年後には母を亡くして再び應試の機會を失うなど運にも恵まれず、結局郷試には四度臨んですべて副榜、つまり補缺となり、終に合格することは無かった。最後に落第した時にはさすがに氣落ちして、一時は仕官の道を諦めたが、天啓三年（一六二三）には「入都就選」

を試みている。これは直接に南京の吏部へ赴き缺員の口を求めるという方法である。官への執着の並々ならぬものであったことが窺えよう。そして崇禎七年（一六三四）、こうした運動が功を奏したのであるうか、ついに念願かない副貢の資格を以つて上海縣丞を授かった。時に五十五歳、濛初が盛んに創作・出版活動を行ったのも、ほぼこの頃までと考えられる。

二 凌濛初の出版

では、濛初はどのような書を出版していたのか。いま濛初が編集・出版にかかわり、中國各地に所藏される明代刻本を、陶湘『明吳興閩版書目』、王重民『中國善本書提要』、杜信孚『明代版刻綜錄』、『北京圖書館古籍善本書目』より拾ってみると、〈表〉のようになる。濛初刻本は刊刻年を明記するものが極めて少なく、ここでは刊刻年のわかるものは後の方に順に並べ、およその時期で「萬曆間」としたのは『明代版刻綜錄』の記述に據った。刊刻年のわかるものでは、二十七歳だった萬曆三十四年（一六〇六）の序のある②から、官に就く二年前、五十三歳の崇禎五年（一六三二）の②までが確認でき、詩集・戲曲から佛教の經典までその刻書はかなりの數に上っている。もちろん、ここに挙げた書が全てというわけではないから、萬曆末から崇禎年間にかけて濛初がいかに活發に出版を行っていたかがわらう。更に凌氏全體となれば、ほぼこれに倍する種類の刻本が上記書目より知られるのである。

さて、これらのうち濛初および凌氏の刊刻になった①から②までは、先に述べたように朱墨二色を主とする「套印本」であること、そして、本文に批評や圈點を加えた「評點本」であることを大きな特徴

としてゐる。「套印」とは一つの色に對し一枚の板木を使う、即ち「板を套(かさ)ねる」の意である。既に北宋にはこの技術のあつたことが知られ、これが南宋に始まり明代に益々盛んとなつた評點本出版の氣風と相俟つて「套印評點本」として結び付き、先の「貧富好醜を問う無く垂涎して之を購わんとす」という狀況を生み出したのであつた。批評や圈點が本文とは別の色で印刷されれば兩者の違いは一見して明らかであり、讀者にとつて便利なことこの上ない。もちろん、そうした實用面の他に、見た目の美しさという付加價值があることは言うまでもない。

この套印評點本の本格的な出版は、凌氏と同じ吳興の刻書家一族として知られる閔氏の人・閔齊伋の、萬曆四十四年(一六一六)韓敬序のある孫鏞(月峰)批點『春秋左傳』十五卷に始まると言われる。閔齊伋(一五八〇?)、字は及武(または及五)、號は寓五(または週五)、吳興烏程の人。濛初とは同年の生まれである。閔氏も凌氏同様、代々官僚を輩出する望族であつたが、閔齊伋は諸生となつてからというもの科擧による官僚の道を求めず著述に耽り、套印本の出版に情熱を傾けた。刊刻した書に『東坡易傳』八卷、『楚辭』二卷、『花間集』四卷、『孟子』二卷、『檀弓』三卷、『春秋公羊傳』十二卷、『穀梁傳』十二卷、『會真六幻西廂』十四卷等々、數多くの套印評點本があり、套印本を「閔本(または閔版)」とも呼ぶのは、その刻するところ多いことに由來する。しかし(表)にも見たように、僅か數年後の同じ萬曆年間中には濛初によつても次々と刊刻が行われ、以後、天啓・崇禎にわたり明末の套印評點本出版はほぼこの兩氏によつて獨占されることとなる。套印本は清代に入つてからも作られるが、一個人あるいは一族がこれだけ大量に出版した例は無く、明末吳興における套印本出

版は時間的・地理的に、際立つて特徴的な活動だつたと言つてよいだらう。

ところで、凌閔二氏が共に吳興烏程の人であるのは決して偶然ではなかつた。「別駕初成公墓志銘」に據れば、凌氏が烏程に籍を置いたのは濛初の高祖父、數が晟舍(烏程縣東部)閔氏の贅婿となつて歸安(烏程の東南に接す)より移り住んで以來であり、この閔氏こそ、閔齊伋ら閔氏一族の先祖であつた。國子監祭酒を務め、藏書家としても知られる濛初の知人馮夢禎は言う。

晟舍、……凌閔二姓の居る所。世々姻戚となるも仇妬を免れず。代々姻戚關係を結ぶ間柄でありながら「仇妬を免れ」なかつた兩氏が、套印本出版をめぐる明末の吳興で覇を競うことになるというのも興味深い。濛初と閔齊伋は兩家の確執の先峰に立つ者として、またライバルとしてお互いを強く意識し合つたであろうことは想像に難くない。凌・閔二氏の出版競争は、この若い二人を軸に俄かに激しさを増すことになる。

始めは朱墨二色のみだつた套印本も、ほどなく套印技術の進歩により多色使いが可能になると、複數の評者の批評・批點をまとめた輯評本などは一家を一色で代表させる、三色から五色の評點本も兩氏によつて刻されるようになる。兩氏の刻書は後世の専門家によつてもしばしば混淆されるほど技術や體裁、紙質までも相い似ており、土地も同じ吳興、となれば勢い「元祖」の名聲をもつてする閔氏に有利たること免れまい。「二番煎じ」を脱して競争するためには、獨自性と付加價值が必須なのである。僅かではあるが閔氏に遅れを取つた濛初は、そうした手立てを模索したに違いない。

〈表〉 濛初が出版に関わった書

①	「陶靖節集」八卷附一卷	晉・陶潛撰、宋・湯漢箋注、凌濛初輯評有跋、凌南榮校	
			* 萬曆間凌濛初刊朱墨套印本〔北・閔・善・綜〕
②	「東坡書傳」二十卷	宋・蘇軾撰、明・楊慎等評、凌濛初輯評有序	* 同上〔北・閔・綜〕
③	「維摩詰所說經」十四卷附一卷	有凌濛初贊	* 同上〔善・綜〕
④	「選詩」七卷	梁・蕭統輯、明・郭正域批點、凌濛初輯評有序有凡例	* 同上〔北・善・綜〕
⑤	「虞初志」七卷	明・袁宏道評	* 同上〔綜〕
⑥	「蘇老泉文集」十三卷	宋・蘇洵撰 明・茅坤等評、凌濛初輯有序	* 同上〔北・閔・善・綜〕
⑦	「李長吉歌詩」四卷外一卷	唐・李賀撰、宋・劉辰翁評、有凌濛初跋	
			* 同上〔北・閔・善・綜〕
⑧	「李詩選」五卷	唐・李白撰、明・楊慎等選、宋・劉辰翁等評、有凌濛初凡例	* 同上〔綜〕
⑨	「蘇長公小品」四卷	宋・蘇軾撰、明・王納諫評	* 同上〔綜〕
⑩	「王摩詰詩集」七卷	唐・王維撰、宋・劉辰翁等評、有凌濛初跋	* 同上〔北・閔・善〕
⑪	「琵琶記」四卷	元・高明撰、凌濛初評校有凡例	* 同上〔北・閔・綜〕
⑫	「西廂記」五卷附解證	元・王德信等撰、凌濛初評	* 同上〔北・閔・綜〕
⑬	「韋蘇州集」十卷附一卷	唐・韋應物撰、宋・劉辰翁等評	* 同上〔閔・綜〕
⑭	「劉辰翁批點三唐人詩集」十四卷	凌濛初輯	* 同上〔綜〕
⑮	「孟東野詩集」十卷	唐・孟郊撰、宋・劉辰翁等評、有凌濛初跋	* 同上〔北・閔・綜〕
⑯	「孟浩然詩集」二卷	唐・孟浩然撰、宋・劉辰翁評、明・李夢陽參、有凌濛初跋	
			* 同上〔北・閔・善・綜〕
⑰	「詩經」不分卷	明・鍾惺批點、有凌濛初序	* 同上〔綜〕
⑱	「周禮訓箋」二十卷	題潛齋撰	* 同上〔綜〕
⑲	「世說新語」八卷	劉宋・劉義慶撰、梁・劉孝標注、宋・劉辰翁等評	
			* 萬曆間凌濛初刊朱墨藍三色套印木（ママ）〔綜〕
⑳	「陶韋合集」十八卷附二卷	凌濛初編、宋・劉辰翁等評	* 明末凌濛初刊朱墨套印本〔北〕
㉑	「圓覺經」二卷	凌濛初校	* 同上〔閔〕
㉒	「蘇長公表啓」五卷	宋・蘇軾撰、凌濛初評選有序	* 同上〔閔〕
㉓	「李于鱗唐詩廣選」七卷	李攀龍選、凌瑞森等輯評、有凌濛初序	
			* 明末凌瑞森、凌南榮刊朱墨套印本〔善〕
㉔	「東坡禪喜集」十四卷	宋・蘇軾撰、明・馮夢禎批點、凌濛初輯增有跋	
			* 天啓元年（1621）凌濛初刊朱墨套印本〔北・閔・綜〕
㉕	「聖門傳詩嫡冢」十六卷附一卷	凌濛初撰輯有序有凡例、凌琛等校訂	
			* 崇禎四年（1631）凌濛初刊朱墨套印本（ママ）〔善・綜〕
㉖	「虬髯翁」一卷（「盛明雜劇二集三十卷」收）	凌濛初撰、沈泰編	
			* 崇禎二年（1629）沈泰序刊〔北〕
㉗	「二刻拍案驚奇」四十卷存二十二卷	凌濛初撰有序	* 崇禎五年（1632）尙友堂刊〔北〕
※上記書目には著録されないが、刊刻年のわかるものに以下の書がある。			
	「後漢書纂」十二卷	凌濛初纂有凡例	* 萬曆三十四年（1606）金陵周氏刊
	「詩逆」不分卷附一卷	凌濛初輯有序、凌瑞森等參訂	* 天啓二年（1622）自序凌氏刊
	「初刻拍案驚奇」四十卷	凌濛初撰	* 崇禎元年（1628）自序尙友堂刊
	「孔門兩弟子言詩翼」七卷	凌濛初輯有序有凡例、凌瀛初等校閱	
			* 崇禎三年（1630）自序凌氏刊

注記：〔北〕は『北京圖書館古籍善本書目』、〔閔〕は『明吳興閔版書目』、〔善〕は『中國善本書提要』、〔綜〕は『明代版刻綜録』のそれぞれの略稱で、そこに著録されていることを示す。（但し〔善〕、〔綜〕著録のうち北京圖書館にのみ所蔵される書は、〔北〕と重複するので記載しない）

三 劉辰翁評點本の刊行

ここで、先程〈表〉に挙げた濛初刻本と、同じ方法で抽出した閱齊級の刻本をそれぞれ四部に分類し、その數と割合を比較してみよう。すると次のようになる。

閱齊級刻本…合計四十六種。うち、

經部十八種 (39.1%)、史部五種 (10.9%)、

子部四種 (8.7%)、集部十九種 (41.3%)

濛初刻本…合計二十五種。うち、

經部四種 (16.0%)、史部0種 (0%)、子部四種 (16.0%)、

集部十七種 (68.0%)

集部の割合が最も高く、史部と子部が低くなっているのは兩者に共通する。また數の上では、子部と集部については兩者の刻書はほとんど同じであり、刻書數の差「二十一種」は、實はほぼ「經部・史部」の刻書數の差に相當していることがわかる。中でも最も大きな違いが見えるのが經部の刻書である。閱齊級は、集部と變わらぬ十八種およそ四割もの經部の書を刻しているが、これは閔氏全體(經部總數十九種)の中で見ても極めて特徴的・個性的である。これに對して濛初の刻書の關心は、この表で見ると限り少なくとも經部へは向かなかつたと言つてよいだらう。

閱齊級が刻したのは、當時坊刻を中心に數多く出版されたことが知られる、經書に對する評點本であつた。閱齊級の刻書が確かに受験生を意識したものであつたことは、その最初の套印本『春秋左傳』の凡例に「其の初學の課業、批評を取る無くんば則ち墨本有る在り」と言ひ、初學者用の評點本は何と言つても套印、と謳つているのにも明ら

かである。套印と評點の關係については前章に觸れたが、經書に注釋を付けてわかりやすく解説した評點本が色分けされて更に見易くなれば、受験生にとつて實に便利なこと、今日のカラフルな参考書やライナーカー等の役割を引合いに出すまでもあるまい。

ところで閱齊級の經部刊刻には、明代における評點が主に經書と詩を對象としたことが深く関わつていよう。評點の始まつた南宋においては、その對象は文章(古文)であつた。しかし明代に入り、科學の中心が論策から經義に移つたことから古文の評點本は出版が下火となり、代わりに經書と、そして元代に始まつた詩に對する評點が盛んに行なわれるようになる。閱齊級が經部の出版に熱心だつたのも、そうした時勢に應じてのことには他ならない。

一方、詩に對する元代の代表的な評點者に方回と劉辰翁がおり、實は濛初が意欲的に刻したのが、この劉辰翁の評點本であつた。例えば『世說新語(一名「世說新語鼓吹」)三卷補四卷(南京圖書館藏)は、馮夢禎の祕藏する劉辰翁批注本をその死後入手し、翻刻出版したものである。のちにこの濛初刻本を増輯出版した從兄弟の凌瀛初は、この書を翻刻して喜ぶ當時の濛初の様子を次のように傳えている。

家弟の初成(濛初)、馮開之先生(夢禎) 祕する所の(劉)辰翁、(劉)應登兩家批注本を得、之を刻し鼓吹と爲す。欣然として曰く、向年蠹簡殘編已に煨燼と成るに、今其の全きを捃撫するを得たり。良に快事爲り、と。

濛初自身その凡例で「世説は補刪を爲す者、遂に須溪(劉辰翁)の批無し。今須溪本を致じ上方に増入す」と、この書が劉辰翁批注本『世說新語』の翻刻たることを特に強調する。〈表〉に挙げた書のうちでも、⑦⑧⑩⑬⑭⑮⑯⑰⑱は劉辰翁によつて批評や圈點が付けられたも

のであつた。その一つ⑤『孟東野詩集』の濛初跋に言う。

餘既に劉須溪批する所の諸家詩を刻せり矣。……須溪先生、詩を評すること最も廣き爲り、而も唐の諸選中亦た時に其(孟東野詩)の數首を評する者有るを見れば、意うに必ず其の本有ること諸家の如し。而れども見るに従う無し。遍く之を索むるに、偶たま一宋雕本を武康の故家に獲る。上に評點有り、以爲らく必ず須溪たるに疑い無し。

既に出版した數種の別集同様に孟東野詩にも劉辰翁評點本があるに違いないと考へ、遍く探し求めたその書を武康(吳興郊外)の舊家でようやく手に入れた、と言うのである。白門(南京)に出かけた際に合刻本を手に入れて輯評した、と序に述べる⑥『陶韋合集』も、實は劉辰翁評點本であつた。濛初の刻した劉辰翁評點本は、最初から意識的に収集出版されたものであつたと言ふことができよう。では、濛初がかくも劉辰翁評點本にこだわつたのは何故なのか。葉德輝『書林清話』にかく言う。

劉辰翁、字は會孟、一生に評點の書甚だ多し。同時の方虛谷回も亦た好んで唐宋人の説部詩集に評點す。坊根刻して以て利を射り、士林靡然として風に向う。

つまり劉辰翁や方回の評點本は賣れたのである。劉辰翁(一二三二-一二九七)、字は會孟、號は須溪、吉州廬陵(江西吉安縣)の人、南宋景定三年(一二六二)の進士。同年に進士及第した方回(字萬里、號虛谷)と共に元代を代表する評點家である。(表)所掲のほか『杜子美詩集』二十卷、『蘇東坡詩集』二十五卷、『王荊文公詩箋注』五十卷等、詩に對する評點本は數多く、また詩以外にも『班馬異同』三十五卷等がある。明代にはそれらのうち九種がまとめられて出版されるな

ど、評點本の隆盛に伴つてその書の人気は大いに高まつたのであつた。外地に足を運んででも手に入れるだけの付加價値を、劉辰翁評點本は持つていたのである。そして、この人氣の劉辰翁評を濛初自身も高く評價していた。⑦『李長吉歌詩』跋には茶陵派の領袖李東陽『麓堂詩話』中の劉辰翁評點に對する言を引き、かく言う。

先輩稱す、善く詩を言う者は威な宋の劉須溪先生に服膺すと。李文正(東陽)公の麓堂詩話に稱す、其の語は簡意は切にして別に自ら一機軸たり、諸人の詩を評する者皆及ばず、と。良に然り。

「詩話」という詩に對する一種の批評を復活したという點で劉辰翁と共通した文學觀からこれを高く評價する李東陽の意見に、全面的な贊同の意を表している。跋の持つ廣告的意味合いを差し引いたとしても、劉辰翁評點本へのこだわりは、決して「利を射」るためだけのものではなかつたと言つてよいだろう。從兄弟瀛初の目に映つた欣然たる濛初の姿は、正しく刻書家にして文人としてのそれであつたと言へるかも知れない。

ところで濛初が出版活動を行なつた萬曆末以降、書房より數多く出版されたのが戯曲・小説に對する評點本であつた。戯曲家としても知られる濛初だが、刻書家として刊行した戯曲には⑧『琵琶記』と⑨『西廂記』の二種が見える。そこで次に、この戯曲本の出版について見て行くことにしたい。

四 戯曲の刊行

戯曲・小説が大量に出版された明末、なかでも『西廂記』と『琵琶記』は南北の戯曲を代表する作品として數多くのテキストが刊行され、ことに萬曆末以降には李卓吾や徐文長らの批評を付けた評點本

が、その名を假託した偽作の生まれるほど流行したことが知られている。しかし濛初は、これら戯曲本の刊行に際しては、詩に對する劉辰翁評點本の時のように借り物の評で済ますということとせず、敢えて自ら筆を執っている。『琵琶記』の凡例には「最近の人は曲というものの眞の面目をわかつていない。このころ偽の李卓吾評點本があるが、本物の李卓吾も曲を理解していないのだからニセモノなど論外だ」と斷じ、「このテキストに（私が）評點を付けた部分は、必ず作家の優れたところであり、見識のある人には自ずと違ひは明らかだろう」と述べるように、そこには戯曲作家であり、『譚曲雜札』という戯曲理論の著作もある濛初の、戯曲批評の現状への不満と、専門家としての自負が窺える。

また濛初本『西廂記』は、民初の貴池劉氏暖紅室刊『棠刻傳劇』（江蘇廣陵古籍刻印社刊影印本がある）に翻刻して收められるほか、王季思校注本や中華書局『元曲選外編』本がそれぞれ底本に採用するなど後世テキストとしての評價も高く、これに本文と批評の両面から検討を加えた『西廂記』版本研究家の蔣星煜氏は「校正・刊刻ともに優れた善本である」と言う。「書を成し利を射るに急に、又た人を倩いて編摩するを亡しむ」と謝肇淛が評した凌氏の刻書、しかも當時最も「射利」が競われた『西廂記』『琵琶記』の刻書において、特に自らの評點を附し、質的にも優れた刻書を行なったところに濛初の戯曲に對する思い入れの強さが感じられよう。ちなみに関齊俊も單刊『西廂會眞傳』と合刻（『六幻西廂』本）二種類の『西廂記』テキストを刊行しており、しかもそこに加えられた評點は関齊俊自身によるもので、やはり「校刻精良な善本」（蔣星煜氏前掲書）であるという。凌閔二氏の戯曲に對する共通した刻書態度は注目されるところであらう。

さて、濛初戯曲本の質の高さはそこに附された挿繪にも及んでいゝ。明末に出版された戯曲・小説は、また多く挿繪入りでもあった。それらの書がしばしば書名の上に「繡像」「繪圖」といつた語を冠することからもわかるように、挿繪は評點と同じく出版側・讀者側雙方にとつて大きな付加価値と見做され、それに伴つて版畫自體の水準も飛躍的に高まつた。例えば福建の建安派、南京の金陵派、徽州鳧縣の徽派等、出版先進地區の風格を代表する畫派が形成されたのはちょうどこの頃である。濛初が刻した『西廂記』と『琵琶記』、そして『識英雄紅佛弄揮配』一卷が全て精巧な挿繪を附しているのも、こうした出版界の潮流を反映したものに他ならない。なかでも版畫史上に残る佳作とされる『西廂記』の二十幅十葉の精緻な挿繪は、わざわざ徽州の刻工黃一彬を招いて彫らせたものである。黃一彬は徽州鳧縣の刻工一族として名高い黃氏の人、『閩範圖說』『青樓韻語』『彩筆情辭』等の合刻があり、特に套印による『程氏墨苑』は有名である。

ところでこの三種の戯曲本の挿繪中あるいは版心下部に刻入されたところから知られる職人は、ひとり黃一彬のみではない。以下に示してみよう。

『西廂記』…王文衡繪、黃一彬手刻。

『琵琶記』…王文衡繪、鄭聖卿手刻。

『識英雄紅佛弄揮配』…馬雲繪、（刻工不明）。

畫工の王文衡と馬雲、刻工鄭聖卿の名が見えるが、これらの職人については残念ながら經歷等は詳らかにしない。黃一彬ほどの廣い名聲は無かつたかもしれないこれらの人々ではあるが、しかし彼らもまた名工と呼んでも良い熟練した職人であること、その腕を特に見込んで仕事を依頼したと思われることが、いくつかの資料によつて知られるの

である。

例えば『西廂記』と『琵琶記』の二本に挿繪を描いた王文衡。『西廂記』圖末尾には「吳門王文衡寫」の款書、その下に「青城」の印記があり、吳門（蘇州）の人で青城と號したことがわかる。いま「明吳興閣版書目」を見ると、繪圖付きの套印本が十二種著録され、うち畫工の名を明記する八種は全て王文衡による。すなわち濛初刻本上記二種の他、『艶異編』十卷、『紅佛傳』四卷、『明珠記』五卷、『邯鄲夢』四卷、『牡丹亭』四卷、『紅梨記』四卷である。このうち『紅佛傳』は「凌玄洲（濛初）校、凌玄觀題」とある凌刻本、『邯鄲夢』は「閔光瑜序」とある閔刻本、また『牡丹亭』は「茅元儀批點有序、茅映記有凡例」とあり、同じく吳興で套印本の出版を行っていた茅氏の刻本である。吳興の刻書家たちが争うように王文衡に挿繪を依頼していた様子が窺えよう。王文衡が吳興刻書を代表する畫工の一人であつたことは間違いない。次に『琵琶記』の刻工鄭聖卿。王重民は⑥『蘇老泉文集』について「濛初の」序文下の書口に『鄭聖卿刻』と記す。凌・閔二家は多くは刻工名を記さないのに、これだけは記している。よつて（私は）特記した」と言う。これに據れば、挿繪の無い書に刻工名を附すのは凌氏の刻書には珍しく、鄭聖卿は濛初が高く評價した刻工だつた、と考えられるのではないか。そして『識英雄紅佛弄揮配』の馬雲がいる。友人でもあつたこの人物が自分の戯曲に挿繪を描くことになつたいきさつを、濛初は八幅の繪の後に付けて、かく言う。

餘既に三傳（『識英雄紅佛弄揮配』）を以て劖厲氏に付すに、友人馬辰翁（雲）見て節を打ち遂に餘の爲に圖を作る。且つ餘に語りて曰く、昔人道う王右丞（維）詩中に畫有り畫中に詩有り。子の曲已に畫の如し矣、と。餘曰く、子の畫中にも乃ち亦曲

有らざらんか、と。辰翁名は雲、字は猶龍、今字を以て行なわる。更に辰翁と字す。博雅多能、此れ特だ其の一斑也。

文面から察するに、馬雲は専門の畫工ではなかつたようだ。しかし文人が畫家を兼ねるのは、文中の王維の例に止まらず明代には沈周や唐寅等一つのスタイルともなつていた。馬雲もそうした文人畫家であつたのだろう。上記一文を附したのには多分に我田引水もあるうが、挿繪について解説を加えたこと自體に馬雲への評價は十分看取されよう。

以上管見の限りではあるが、黄一彬の場合同様これらは濛初が出版に際し挿繪という付加価値にもかなりの注意を拂つていたことを示唆するものであるう。それはまた、濛初の刻書家としての幅広い活動の所産であつた。

五 人的ネットワークの活用

馮夢禎との關係

ところで畫家馬雲の場合に見えるように、濛初の刻書活動を支える重要な要素となつていたのが「人的ネットワーク」とも言える友人との交友關係である。例えば⑦『詩經』は、友人鍾惺を北京に訪ねた折に評點を付けたテキストを見せられ、持ち歸つて刻したものであつた。⑧⑨『孟浩然詩集』は李夢陽參評本を友人潘景昇の家刻本に得ている。前述した劉辰翁評點本の數多い出版なども、このようなネットワークによる情報交換無しには恐らく實現は困難であつただろう。『陶韋合集』は南京で、また『孟東野詩集』は探し求めたテキストの宋版を地元吳興の舊家で發見したものだつたように、「吳書輩出し、劖厲されて遺す無し」という状況にあつた萬曆間、付加価値の高い善本を

入手するためにも廣く情報網を張り巡らしておくことは不可缺であつた。そうしたネットワークの具體的な様子を窺えるのが、馮夢禎との關係である。

天啓元年（一六二二）刊の④『東坡禪喜集』に附せられた馮夢禎による跋は、そもそも濛初所藏の元版『景德傳燈錄』のために萬曆三十一年（一六〇三）に書かれたものである。そこには濛初の善本入手に對する態度を傳えて、かく言う。

景德傳燈錄、餘畜える所の舊本甚だ佳し。竊かに之れを寶惜するも、未だ探索するに暇あらず。今春吾の凌玄房（濛初）に遇えば、餘に此の本を誇示す。餘の藏本と異なる無く、而も裝潢に加うるもの有り。卷末を検すれば、勝國（元朝）至元間の板たるを知る。元板の精、幾んど宋板を亂す。又た爲に燈を傳えて寶とす可し。此の外又た續燈、聯燈、廣燈等も有り。當に必ず佳本を有すること此くの如くあるべし。錄者安んぞ盡く之れを有して快と爲すを得んや。然りと雖ども能く探索を加うれば、一則兩則にて便ち佛祖の鼻孔を穿つ可し。然らずんば徒づらに之れを寶惜し、以つて蠹魚に供して爲す無きなり。餘老いたり矣。願わくば以て玄房を勉まさん。

馮夢禎（一五四六～一六〇五）、字は開之、浙江秀水（嘉興）の人。萬曆五年（一五七七）の進士。翰林院編修を授かるが、時の首輔張居正に逆らい一時官を辭して郷里に歸り、のち復官して南京國子監祭酒にまで至つた。著に『快雪堂集』六十四卷、『快雪堂漫錄』一卷、『歷代貢舉志』一卷等がある。藏書家としても知られ、杭州孤山の麓に藏書樓を築いた。「快雪堂」はその室名である。跋の中で馮夢禎は、自ら寶藏する舊本『景德傳燈錄』に劣らぬ善本を歳若い濛初（當時二十四

歲）が一本のみならず探し出して入手したことに驚き、「佳本」を求めること此くの如くあるべきだと稱贊する。そして自分も含め、善本を秘藏することに満足し、テキストの探索を忘れがちな藏書家の態度を反省すると同時に、この若い刻書家の善本入手への眞摯な取組みに聲援を送つていたのである。

その『東坡禪喜集』濛初跋は、馮夢禎が『景德傳燈錄』に跋を付すことになつた経緯を更に次のように説明している。すなわち、馮夢禎は吳閩（蘇州）に遊んだ折、濛初を誘つて舟を連ね作詩に興じた。舟中で茶を飲みながら、今度は嘉禾（嘉興）で刊刻成つたばかりの『研北雜志』を手に取り誤字數十を正した。さて校勘が済むと濛初に「なぜ袋を携えてきたのか、何か書籍を手に入れたのか」と尋ねたので、元版『傳燈錄』と自ら増輯した『東坡禪喜集』及び『山谷禪喜集』を出して見せたところ、馮夢禎は『傳燈錄』の版が精巧なのを大層気に入つて跋を書いた。その際『禪喜集』にも評點を加えてくれたのだ、と。

これらの資料からは、濛初と馮夢禎が交友の場を通して善本の披露や貸し借り、校表といった書籍に關する情報交換を行なつていた様子が窺え興味深い。實は『列朝詩集』にも、馮夢禎が梅鼎祚を始め焦竑、趙琦美ら藏書家でもあり刻書家でもある仲間と三年に一度集まり、それぞれが入手した善本を持ち寄つて校表・寫本を行なおうと約束したという記事が見え、當時こつた情報交換が馮夢禎のような藏書家を中心に行なわれていたことが知られる。その「人的ネットワー」は出版活動の上にも生かされたであろう。濛初はおそらく馮夢禎の藏書の中に舊本『傳燈錄』があることを知つていたのであろう。入手した元版『傳燈錄』を携えてきたのも單にそれを披瀝し自慢するためではなく、馮夢禎に藏書との比較照合をしてもらう心積もりがあつた

結 び

からに相違あるまい。濛初はこの先學から出版に關する多くの恩恵を受け、馮夢禎もまた進んで濛初の爲に校勘の手ほどきをし、評點を加え、跋を書き、援助を惜しまなかつた。『快雪堂集』によれば、二人の交際はこの跋を書く一年前の萬曆三十年（一六〇二）に馮夢禎が吳興に濛初を訪ねて以來のこと、馮夢禎の亡くなる萬曆三十三年（一六〇五）までお互いの家を訪問したり舟遊びを楽しんだり、親子ほどの歳の差を思わせない付き合いが續いた。馮夢禎稱するところの「女房」は濛初の「稚年の舊字」である、と濛初は跋にことわつてゐる。國子監祭酒まで務めた大官の文人とのかくも親密な交わりは興味引かれるところであるが、上記の『快雪堂集』馮夢禎が初めて濛初を訪ねた萬曆三十年十一月八日の條に「謝允（婚約に當たり男性側が女性側に品物を贈り挨拶する）の儀を致す」（卷五九）、同十日の條に「是の日、回盤（女性側が返禮する）」（同前）とあり、また同集卷三〇所收「元板傳燈錄跋」にも「姻家凌玄房」と言うことから、姻戚關係にあつたらしい。いずれにしても、馮夢禎のような知名度と博識を備えた人物との親交が濛初の出版活動にとつて貴重な財産となつたことは間違いない。

以上のように濛初はテキストを求めて時には外地にまで足を延ばし、藏書家から藏書を借り受け、名工に挿繪を依頼し、「人的ネットワーク」を活用しつつ、また時代の要求を敏感に捉えながら、より付加価値の高い書の出版を目指して精力的に活動したのであつた。こうした行動を家刻を業とした濛初が行なつていたとなれば、それはもはや趣味の範圍を超えた行爲であつたといふことに他ならない。濛初は眞劍に刻書活動を行なつていたのである。それはまた、すこぶる明末的風景であつた。

ところで套印本出版に奔走した濛初も、俗文學出版をはばかつてか、それとも豪華本という套印の性格がコストと採算と言つたような實際的な問題をもたらしただためか、自著「二拍」を含め通俗小説を自ら刊行することは無かつた。しかし例えは濛初が出版の際に重視した評點は、戯曲と同じく「二拍」にも濛初自ら付していることが知られ、作品理解の上でそれら眉批・夾批・圈點に對する考察の重要性が改めて確認されるように、濛初の創作活動にも「刻書活動」という角度からアプローチすることが可能であろう。また、文獻の不足から不明な部分も多い凌濛初の事跡・人物について、刻書という實際に行つた活動面から見えていく方法での更に詳細な検討作業を、引き続きおこなつて行きたいと考えている。それらはすべて今後の課題である。

さて、五十五歳でようやく官途についた濛初が、それを境に創作を含めあれほどまでに情熱を燃やした出版に急に興味を失つたかのようにほぼその活動を終息させていること、既に述べた通りである。官吏となつて上海に居を定めて八年、その間海防をつかさどり鹽場の管理に當つた濛初は、拔擢されて徐州通判となる。翌崇禎十六年（一六四三）、全國的に農民起義の動きが高まる中、徐州一帯に起こつた農民武裝團を投降させた功により楚中監軍僉事を授かるが徐州に留まり、崇禎十七年（一六四四）甲申の年、民と共に李自成の軍に抗せんとする幕中にあつて病死した。官に就いて十年目、六十五歳であつた。『四庫提要』が濛初撰『國門集一卷、國門乙集一卷』の條に「蓋し屢々場屋の時に蹟ぎ、故に抑鬱無聊の作頗る多し云」と評する他、「二拍」執筆の動機を科擧落第の失意に求める論も少なくない。このよう

に考えるならば、その出版活動もまた「抑鬱無聊」の慰みであった、とでもいうことになるか。だが今まで見てきた所から窺い知れる濛初の出版に對する熱意が、そうした消極的動機に求められる程度のものであるとはとても思えない。「墓誌銘」によれば、濛初は李自成軍に抗する幕中で血を吐きながら「生きて保障する能わざれば死して當に厲鬼となり、賊を殛すべし」と言い、「吾が百姓を傷つくる無かれ」と三たび大呼して卒した。殉死した者十餘人、村人は祠を建ててこれを祀つたという。官吏となつてからの濛初は正しく「士人」であつた。しかし、同様に官吏となる以前の濛初は、紛れもなく「文人」にして「刻書家」であつたと言ふことができよう。

ちなみに濛初のライバル閔齊伋は明朝滅亡の年の順治十八年（一六六一）に、八十二歳の高齡にして『六書通』十卷を上梓した。生涯官を求めず出版に専心し長壽を保つた閔齊伋の生き方は、濛初とはまことに好對照をなしている。とは言え、套印本をめぐり吳興に覇を競つたこの二人の刻書家の一生が、ともに明末という時代と社會の一面を象徴していることは確かであろう。

注

- (1) 東京内閣文庫所藏の萬曆刊朱墨印本による。
- (2) 井上進「書肆・書賈・文人」（一九九四年、荒井健編『中華文人の生活』所收、平凡社）参照。
- (3) 金陵、新安、吳興三地、劊劊之精者、不下宋板。……大凡書刻急於射利者、必不能精、蓋不能捐重價故耳。近來吳興、金陵、駁駁踏此病矣。……吳興凌氏諸刻、急於成書射利、又亡於倩人編摩。其間亥豕相望、何怪其然（『五雜俎』卷一三）。
- (4) 朱彝尊『明詩綜』卷五七參照。

(5) 任道斌「試論明代杭嘉湖平原市鎮的發展」（一九九一年、『明史研究論叢』第4輯、江蘇古籍出版社）参照。

(6) 清嘉慶十年刊。葉德均「凌濛初事跡繫年」はこれを引くが、未見。卷二「別駕初成公墓志銘」は、周紹良「曲目叢拾」（一九八二年、『學林漫錄』第五集、中華書局）に全文が著録される。

(7) 光緒七年修『烏程縣志』卷一六、乾隆十一年修『烏程縣志』卷六、同治十三年修『湖州府志』卷七八。

(8) 明末の通俗文學に對する評點本の隆盛に先行して、萬曆年間初期から、史書を中心に「評林」を銘打つ加評された書籍が相當數出版されており、『史記評林』はその先驅けに位置付けられる。詳しくは、丸山浩明「評林本隆盛史略」（一九九五年、二松學舎大學『人文論叢』第五四輯）、高津孝「明代評點考」（一九九七年、『東方學會創立五十周年記念東方學論集』）参照。

(9) 一九三八年、『青鶴』第五卷第一三期所收。套印本の蒐集家でもあつた陶湘が明末刊行になる套印本を四部に分類し、書名・卷數・序跋の有無等を記す。なお、『河南圖書館館刊』第三期（一九三三年）所載の傳鈔本『明吳興閔氏刊書目』に著録される套印本の書名はすべて陶湘書目にも見えるが、卷數には若干の異同がある。

(10) 『明代版刻綜録』には濛初以下、雲、瀛初、汝亨、啓康、杜若、性德、迪知、稚隆、毓楠、弘憲、約言ら十二人の吳興凌氏が刊行した書四十八種が、『中國善本書提要』には十九人五十二種が著録される。

(11) 套印については柳存仁「明代的彩色印刷—插圖—評點—畫譜—圖籍的衍變」（一九四一年、『大風半月刊』第九〇期、九一期、一九九一年、『中國印刷史料選輯』之三『曆代刻書概況』所收、印刷工業出版社）、姚伯岳「明代吳興閔凌二氏の套版印刷」（一九八五年、『圖書館工作與研究』第一期、同前所收）および同『版本學』（一九九三年、北京大學出版社）、曹之『中國印刷術的起源』（一九九四年、武漢大學出版社）参照。

(12) 金柏東「温州發現《蠶母》套色版畫」(一九九五年、『文物』第五期)。

この記事については金文京先生より御教示を得た。

(13) 韓敬序に「吾郷閩赤如、遇五(齊伋)、用和昆從、手擷分次經傳、特受先生(孫鑣)之評、以朱副墨、一覽石然」という。東京内閣文庫所蔵本による。

(14) 閔齊伋撰『六書通』十巻の自序に「順治辛丑仲冬五湖閔齊伋寓五父記時年八十有二」と題す。東京内閣文庫所蔵本による。

(15) 注(7)所掲の光緒『烏程縣志』巻一六および『明代版刻綜録』参照。

(16) 同じ吳興の茅氏にも套印評點本があることが知られるが、例えば『明代版刻綜録』には天啓元年茅兆河刊『解莊集』十二巻が著録されるのみ等、閔・凌二氏以外の套印評點本は全體のほんの僅かに過ぎない。

(17) 注(6)所掲。

(18) 晟舍、……凌閔二姓所居。世爲姻戚而不免仇妬(馮夢禎『快雪堂集』巻二八「乙巳十月出行記」)。

(19) 三色套印本には閔齊伋刊『東坡志林』五巻、凌弘憲刊『大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經』十巻等、四色套印には凌瀛初刊『世說新語』八巻等、五色套印には閔繩初刊『劉氏文心雕龍』二巻注二巻、凌啓康刊『蘇長公合作』八巻等が知られる。

(20) 蔣星煜『明刊本西廂記研究』(一九八二年、中國戲劇出版社)「凌刻《西廂記》與閔刻《西廂記》」の條参照。

(21) 評點の歴史については、高津孝「宋元評點考」(一九九一年、鹿兒島大學法文學部紀要『人文學科論集』第三一號)および同「明代評點考」(注(8)所掲)に詳しい論究があり、本稿の評點に關する部分は多くこれを参照した。

(22) 家弟初成、得馮開之先生所秘辰翁、應登兩家批注本、刻之爲鼓吹。欣然曰、向年蠶簡殘編已成煨燼、今獲摺撫其全。良爲快事(注(19)所掲『世說新語八巻』凌瀛初自序。南京圖書館所蔵の白黒マイクロフィルム

明末吳興凌氏刻書活動考

による)。

(23) 餘既刻劉須溪所批諸家詩矣。……劉須溪先生評詩爲最廣、而唐諸選中亦時見有評其數首者、意必有其本如諸家、而無從見也。遍索之、偶獲一宋雕本於武康故家。上有評點、以爲必須溪無疑(南京圖書館所蔵の凌瀛初刊朱墨印本による)。

(24) 餘游白門時、以其刻見示、爲之爽然(浙江圖書館所蔵の凌瀛初刊朱墨印本による)。

(25) 劉辰翁、字會孟、一生評點之書甚多。同時方虛谷回亦好評點唐宋人說部詩集。坊估刻以射利、士林靡然向風(巻二「刻書有圈點之始」)。

(26) 『宋史翼』巻三五。

(27) 東京内閣文庫に明刊本『劉須溪評點九種書』が藏される。

(28) 先輩稱、善言詩者、咸服膺宋劉須溪先生。李文正公麓堂詩話、稱其語簡意切、別自一機軸、諸人評詩者皆不及、良然。跋には更に明・徐渭の評と比べて次のように言う「……近世徐文長亦有評、恐未必能及先生。當自有辨之者」。また『王摩詰詩集』瀛初跋に「今劉本止七巻。……文賦諸篇劉無評語、及餘人和章劉本所無、故俱不贅」、同『孟浩然詩集』跋にも「今全錄則從劉本、次第則從李本、……若從劉、則李批不協耳」と言い、劉辰翁評への評價は他の評點者のものに比べても一段と高いことがわかる。以上の記述は、浙江圖書館所蔵の凌氏刊朱墨印本による。

(29) 今人選曲、但知賞新篁池閣、長空萬里等、皆不識眞面目。此本加丹鉛處、必曲家勝場、知者自辨。至近時有歎李卓吾批點本、夫眞卓吾、且不解曲、況效鑿拾唾者、益不足論矣(南京圖書館所蔵の凌瀛初刊朱墨印本による)。

(30) 新文藝出版社(一九五四年)版のほか、古典文學出版社、中華書局上海編輯所版、上海古籍出版社版がある。

(31) 注(20)所掲参照。

- (32) ドイツのケルン市立美術館には「寓五筆授」の款書と「市」「五」の印のある閑齊版刊と思われる套印本「西廂記圖」二十一幅が藏されており、その影印が同美術館より出版されている。Edith Dittrich『Das Westzimmer—Hsi-hsiang chi: Chinesische Farbholschnitte von Min Chi-chi 1640』(一九七七年、Museum der Stadt Köln) 参照。この挿繪の存在は大木康先生よりお教えいただいた。套印による挿繪は珍しく、このあとに見て行く凌濛初の挿繪への關心と合わせ興味深い。なお傳田明編『増訂明元元雜劇西廂記目錄』(一九七九年、汲古書院) 八七頁著録の天理圖書館藏鈔本閣週五本(據北京圖書館藏本)には原本の挿繪の寫眞二幅が添付され、その一枚・第一五の圖に款書「庚辰秋日/禺五」とあるという。これはケルン本に一致し、あるいは同版かと思われるが、未見。
- (33) 南京圖書館に民國上海影印明末刻本(凌濛初撰有小引)が藏される。以下に見るように、濛初がこの書の出版に直接携わっていたのは確かだが、自身の(あるいは凌氏の)刊刻になるか否かは不明。
- (34) 『中國美術家人名辭典』(一九九二年、上海人民美術出版社)、および周蕪『徽派版畫史論集』(一九八四年、安徽人民出版社) 五「黃氏宗譜」與黃氏刻書考證」の條參照。
- (35) この他、上海圖書館所藏の凌濛初刊朱墨印本『維摩詰所說經』十四卷附一卷には「蘇臺弟子王文衡敬寫」の款書のある半葉一幅の挿繪が附される。
- (36) 王重民『中國善本書提要』(一九八三年、上海古籍出版社)の「蘇老泉全(ママ)集」の條による。「序文下書口記、鄭聖卿刻」、凌、閔二家多不記刻工姓氏、此獨有之、故特爲標出」。
- (37) 餘既以三傳付劄劄氏、友人馬辰翁見而擊節、遂爲餘作圖。且語餘曰、昔人道王右丞詩中有畫、畫中有詩、子曲已如畫矣。餘曰、子畫中不乃亦有曲耶。辰翁名雲、字猶龍、今以字行、更字辰翁。博雅多能、此特
- 其一斑也(注(33)所掲による)。
- (38) 凌濛初序に「吾友鍾伯敬(惺)、以詩起家。在長安邸中、示餘以所評本。……餘讀而快心」。また同書凌杜若跋に「仲父初成、自燕中歸、示餘以鍾伯敬先生所評點詩經本」とある(南京圖書館所藏の凌杜若刊朱墨印本による)。
- (39) 凌濛初跋に「襄陽詩集……近更得友人潘景昇家所梓行、則復有李空同先生(夢陽)所參評」とある。注(28)所掲による。
- (40) 注(3)所掲。注(2)所掲論文參照。
- (41) 景德傳燈錄、餘所畜舊本甚佳。竊寶惜之、未暇探索。今春遇召凌玄房、誇示餘此本。與餘藏本無異、而裝潢有加焉。檢卷末、知爲勝國至元間板。又爲傳燈可寶也。此外又有續燈、聯燈、廣燈等、當必有佳本如此。錄者安得盡有之爲快。雖然能加探索、一則兩則便可穿佛祖鼻孔。不然徒寶惜之、以供蠹魚無爲也。餘老矣。願以勉玄房(南京圖書館所藏の凌濛初刊朱墨印本による)。
- (42) 『明人傳記資料索引』(一九八七年、中華書局)參照。
- (43) 開之先生有吳閩之遊、招餘同往、因聯舟以行各有詩。……舟中煮茗相對、輒手一峽商榷。時嘉禾方刻研北雜志成、先生爲之正訛字數十、且多億中以爲快。校竟問餘、奚引携、得何書。餘以景德傳燈錄及蘇黃禪喜集對。蘇集舊多挂漏、而餘蓋稍益之者也。先生愛傳燈錄之精、好爲書一跋、又點閱二禪喜集(注(41)所掲)。
- (44) 禹金(鼎祚)好聚書、嘗與焦弱侯、馮開之、暨虞山趙玄度訂約搜訪、期三年一會於金陵、各書其所得異書逸典、互相讎寫。事雖未就、其志尙可以千古矣(錢謙益『列朝詩集小傳』丁集下「梅太學鼎祚」)。
- (45) 卷五九、卷六〇、および卷二八。
- (46) 濛初はこの跋を『東坡禪喜集』に附す際、なぜか「姻家」の文字を削つている(注(41)所掲本)。稱贊の言葉は姻戚関係によるものとされるのを恐れたのであろうか。そもそも「傳燈錄」の跋をわざわざ「禪

『喜集』に附したのは、馮夢禎跋文の付加価値も考えてのことであろう。文字の削除も出版戦略の一つと言えるかも知れない。

(47) ちなみに、多くの俗文學出版に関わった馮夢龍も、戯曲(『墨憨齋定本傳奇』)は自ら刊行したようであるが、小説の刊行は行っていない。大木康「明末江南における出版文化の研究」(一九九一年、『廣島大學文學部紀要』第五〇巻特輯號一)参照。

(48) 明崇禎間尙友堂刻本『拍案驚奇』は扉頁に「即空觀評閱出像小説」の語を冠する。また『二刻拍案驚奇』の評が濛初によることについては、東京内閣文庫所蔵本影印『二刻拍案驚奇』(一九八五年、上海古籍出版社)序に章培恒氏の指摘がある。

(49) 例えば馮保善「論《二拍》的現實意蘊」(一九九〇年、『社會科學研究』第四期)、王枝忠「濛初」(一九九三年、周鈞韜主編『中國通俗小說家評傳』、中州古籍出版社)等。

(50) 公呼百姓謂曰、生不能保障、死當爲厲鬼殭賊。言與血俱、大呼無傷吾百姓者三而卒。……自死以殉者十餘人。……謀建祠而奉之(注(6)所掲)。

(51) 注(14)所掲。

(付記) 本稿は、大阪市立大學で開催された平成九年度日本中國學會第四十九回大會に於ける口頭發表をまとめたものである。貴重な藏書の閲覧を許された南京圖書館ほか各圖書館の御厚意、また發表および執筆に際し受けた諸先學の御教示に心より感謝申し上げます。